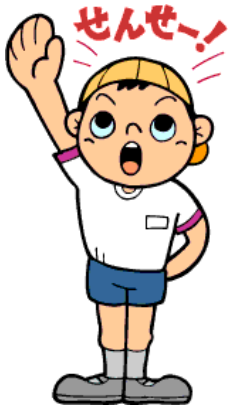
所報

美　濃　市　教　育　研　究　所
第３１７号平成２５年９月２０日発行
電　話（０５７５）３５－２３３４
ＦＡＸ（０５７５）３５－３１３４
e-mail：kyouikuken@city.mino.lg.jp

『いつ躾るの…？』



学校教育課長　五十川安弘

「今でしょ！」この言葉を使うと、最近では親父ギャグを発した時のように引かれてしまいそうですが、今、時の人、林 修 先生のお話を引用します。

日曜日の夜に「あすなろラボ」という番組をやっています（話題のドラマ『半沢直樹』と同時間帯です）が、そこで登場する林先生の講義が好評を博しています。ある日の放送では、子育て中の母親達に「子育て論・教育論」をぶってみえた中で、こんな話がありました。

「子供に対して様々な躾をする上で、最も大切な躾は何ですか？」

それに対して、林先生はきっぱりと「躾るべきは姿勢だ！」と強調してみえました。

このことは、私も理科教師の端くれなのですが、理科授業の「人類の進化」の学習の際に必ず触れてきた話でした。それは、こういう内容です。

人が猿からヒトへと進化できたのは、アフリカ大陸の地殻変動により山脈ができ、西側は密林地帯、東側は乾燥したサバンナとなり、東側の草原に降り立った猿たちが二足歩行を始めるようになって、背骨の上に重たい頭部が乗っかったことと、手を自在に使えるようになったことから、脳が大きく発達するようになったことによること。

そして、ヒトの一生は、母親の胎内に命が宿った時から、その『種』の進化の過程をたどって成長し大人になるということ。

この「進化の過程」や「成長の過程」から言えることは、「成長期の子供にとって、常に姿勢を良くして重たい頭を背骨（の延長線上）にしっかりと乗せて生活することは、脳を発達させるためにとても大切なことなのだ。」ということ。

番組の中で林先生が、「姿勢が悪く崩れた態度の人で学力優秀な人はいない！」と断言されると、聴講していた親達は、「尤もなこと！」と頷くことしきりでした。

学習に限らず、剣道や柔道を始めとするスポーツの世界、能や歌舞伎、バレエ、書道、茶道…等々の世界でも、物事を極めた人たちの姿は、決まって背筋がピンと伸びて凛としておられます。あらゆる道で「姿勢の大切さ」は、共通する「基本中の基本である」というわけです。

かつての日本の教育現場では、姿勢を正すことや鉛筆の持ち方・箸の持ち方等々について口うるさく指導されていたのに、最近の学校教育の現場ではどうなのでしょう？（勿論、その前に家庭教育があるべきなのですが…。）

私塾の講師という肩書きの方に、子育て論においてそんなことを強調され、今時の親たちがその言葉に強く感化されて…。公教育を司っている私達は、何を指導してきたのだろうと、少し歯がゆい気持ちにもなりました。

「躾」は「身が美しい」という文字どおりの言葉ですが、「しつづける」のが「しつけ」であるとも言われます。どうか、「美濃市の子ども達は、みんな姿勢が良い！」と言われるように、あらゆる教育現場でこだわって指導していきたいと思うこの頃です。

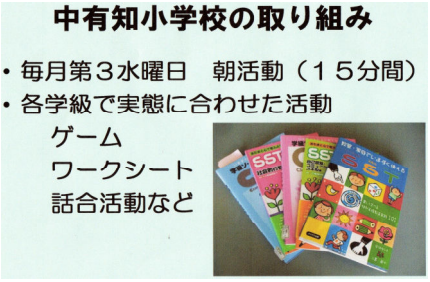
いつ躾るの？…今でしょ!!

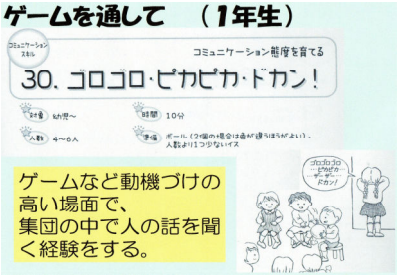
『Ｑ－Ｕを生かしたいごこちのよい学級集団をつくるために』

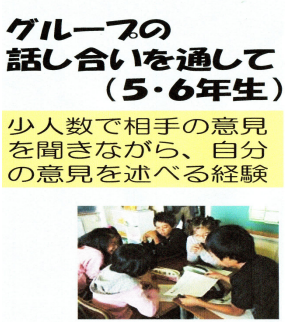
美濃市教育研究所　嘱託所員の実践発表から　Ｈ２５年８月２８日

３名の嘱託所員（牧谷小・井上宏文教諭。中有知小・山口充代教諭。昭和中・坂本昇教諭）は、昨年度から「Ｑ－Ｕを生かしたいごこちのよい学級集団をつくるために」のテーマのもと、美濃市の全小中学校で行われたＱ－Ｕの結果から学級の状況をつかみ、そこから見えてきた課題を解消するための実践を行っています。

中有知小学校では、毎月１回、朝活動の中で、１５分間の社会的スキルを身に付けるための活動の取組を始めました。生徒指導主事の提案のもと、各学年が児童の実態にあわせて行っています。意図的にゲームを取り入れたり、きっかけ作りにするためのワークシートを用いたり、少人数での話し合いを取り入れたりしながら、進めています。毎月１回の取り組みではありますが、この取り組みを積み重ねていきたいと考えています。







昭和中学校では、今年度は、Ｑ－Ｕを生かした社会的スキルを身に付けるため全職員でＱ－Ｕについての認識、共通理解が大切であると考え、講師を招いて校内研修会を開きました。内容は、

・Ｑ－Ｕについて（開発の経緯、目的、留意点、構成等）
・Ｑ－Ｕ結果についての検討（見方・手立て・変化等）
・Ｑ－Ｕを生かした社会的スキルを身に付けるための活動

さらに、Ｑ－Ｕに関わる学級集団作りの書物も購入しました。

今後は、道徳・学活・総合等の時間を有効に使い、全校的・学年体制で継続的な社会的スキルを身に付けるための活動を実践していきたいと考えています。

これまでの成果と課題

◎Ｑ－Ｕの結果を分析して、人間関係を客観的に把握することができた。

◎集団や個々の状態を分析し、それに基づき、学級経営上の課題に応じた意図的なスキルを行ったりした結果から、教師がＱ－Ｕの結果を生かした社会的スキルを身に付けるための活動等を行うことで，いごこちのよい学級集団へと方向付けることができた。

◎社会的スキルを身に付けるための活動等を行う中で、児童生徒に関わり方を学ばせる機会を設けたことが、どのように仲間と関わることが大切かということを児童生徒に捉えさせることができた。

●社会的スキルを身に付けるための活動を行うことが有効であることは分かった。さらに、他の社会的スキルを身に付けるための活動と組み合わせて行うことで、生徒の変容を見ていくことが大切である。

●十分に社会的スキルを身に付けるための活動を行うための時間を確保することが大切である。

今後さらに、Ｑ－Ｕを生かしたいごこちのよい学級集団を作るための実践を深め、年度末には研究紀要に掲載して行きたい思います。

Ｈ２５年度夏期研修講座から

講座２　学級経営力Ｂ　　８／２２（木）

講師　武井　由典　教頭　先生（可児市立南帷子小学校）
会場　美濃市教委　会議室　・参加者　１３名（関市３名）

・　「生徒指導の側面を大切にした学級経営の留意点」について、豊富な具体的実践に基づいてお話をしていただきました。

・どう指導すれば解決するかと考えるより、そうせざるをえない苦しみを知り助けるためのチャンスと捉えるかが大切である。

（受講者から）

・　何か問題が起きた時は、子ども達を頭ごなしに叱るのではなく、子ども達の心の内面を考えたり、生育歴、発達障がいといった、バックグランドを常に考えて指導に当たることが大切であることを感じました。

講座５　絵画指導の基礎　８／２９（木）

講師　福田　裕治　先生　会場　藍見小学校
参加者　２２名（関市１１名）

・「楽しく無ければ図工じゃない」と図工美術教育の本質や指導者としてのあり方を、様々な実践例を通して、お話していただいた後、「葉っぱのデザイン」を赤・青・黄色の３つの絵の具を使って製作する実技研修を行いました。

（受講者から）

・　制作中は常に自己決定の訓練の場であるということが実際に葉っぱのデザインを描いている中で実感することができました。指導者がどんな言葉がけをするとよいのか。子どもたちの自己決定を認め「大丈夫だよ」「進めていきなさい」という構えで声をかけていくことが非常に大切だと感じました。

・いろいろな実践を紹介していただけ、こんなこともできるんだ、あんなこともと自分の教え方が広がりました。今までここまでダイナミックに実践したことがないのでやってみたくなりました。

講座１２　美濃市の歴史

８／２３（金）

（左の記事・写真は、中日新聞社の許諾を得て掲載しています）

地域の自然や歴史学ぶ

美濃　小中校教諭の研修会（中日 H25.8.）

学校教諭の研修などを企画している美濃市教育研究所は、市内小中学校の教諭を対象に研修会「美濃市の歴史」を開いた。

地域の自然や歴史を学び、郷土愛を育むことで活性化を目指す「美濃学」を推進しようと、四年前から取り組んでいる。社会科教諭ら十一人が参加した。

市教委人づくり文化課の高木宏和課長補佐（五三）が、江戸から明治時代にかけて美濃を治めた金森長近による町づくりを解説。うだつの上がる町並みが、長良川の水害を契機に整備された経緯なども紹介した。

引き続き、実際の町並みや金森の菩提寺、清泰寺を散策し、学んだことを確認しながら知識を深めた。

研究所の丹羽敏朗所長（六三）は「まず先生に興味を持ってもらい、その面白さを子どもたちに伝えてほしい」と話していた。

（織田龍穂）

高木さん（左から３人目）の解説に耳を傾ける参加者ら＝美濃市殿町の清泰寺で

講座１１　発達障がいの理解と支援Ｂ　８／３０（木）

講師　橋本　治　　岐阜大学教育学部　准教授
参加者　５２名（美濃３０・関他２２）
・子どもたちの発達の現状・いじめ・不登校・自殺などのデータから、また、各市の取り組みを紹介されたあと、３つのケースを通して、発達障がいの理解と支援のあり方を説明していただきました。
（受講者から）
・　発達障がいが招きやすい二次障がい（不登校・行為障がい・いじめ・自殺等）の危険性や、また、それを防ぐための対応方法もよく分かりました。今、学校での対応は、対処・支援に留まっていることが多く、自覚の段階まで意図的に対応している例は少ないと思われます。中には、対処の段階で対応しているにもかかわらず、手を離してしまうような例も聞きます。その子の将来の成長を見越して長い目で支援を続けていくことの大切さを強く感じた３時間でした。

教育研究会主催　教育講演会（８月２８日）

講師　岐阜女子大学　小森芳順　教授　　会場：中央公民館
演題　「心理テストの活用と児童生徒の理解」

昭和５０年代の「ソシオメトリーテスト」などから、平成元年代の「カウンセリングマインド」、平成１０年代の学級崩壊・発達障がい・学級集団の把握としてのＱ－Ｕ。そして平成２０年代の特別支援教育や発達障がいのアセスメントまでの心理検査の流れなどのお話をされました。
そして、各種心理検査の活用の実際や目的、そして児童生徒理解のための視点や方法を具体的な事例を基に分かりやすくお話されました。特にＱ－Ｕについては、あくまでも児童生徒側の検査であること、結果を拡大解釈しないで、総合的に判断することの大切さをお話頂きました。

教育研究所データバンクよりのお知らせ！シンクライアント文書キャビネットに２６

昨年度、９月に各学校に指導案の依頼を開始いたしましてから丁度１年で、２６の指導案を文書キャビネットへ入れて頂きました。（**小～算４・社１・体１・生１・道１３・中～国１・英１・音１・美１・体１・特支１）各校のその後の指導案を指導案ホルダーへ是非入れて下さい。**

雑感　～実りの秋・東京オリンピックに向け　～　*名人と言われて今日も蝗獲る*

我が家の周りは、９月の中旬に稲刈りが終わり、山間の田も少しほっと一息ついている。この時期になると、我が家では、孫達と一緒に稲刈りの終わった田の畦や休耕田で蝗（いなご）を獲る。
ペットボトルに獲った蝗を入れる。３０分ほどで５０匹くらいは獲れる。２～３日ネットの袋に入れておいて、茹でる。足を取って煎る。醤油で味付けし、食卓に上る。最高級の食材である。この他にこれからは、へぼ（スズメバチ）が時期となる。昔は鉄砲虫（カミキリムシの幼虫）、カイコのさなぎなども食べた。
今年５月のＦＡＯ（国連食料農業機関）の報告書「食べられる昆虫　食料安全保障の展望」によると、２０５０年の世界人口は９０億人となり食料不足が深刻化する。昆虫は食品として生産効率や栄養面でもすぐれており、食料や飼料としての可能性が高いとしている。

今も世界でおよそ２０億人が１９００種類の昆虫を食べており、珍しい文化ではない。
抵抗もあるが、子どもの頃から日常的に食べれば難しくないかもしれない。是非、日本人が生き残るためにも、昆虫食の実践を学校からで始めてはどうか。「昆虫食による体力と学力の向上」
そうすれば、飛んで跳ねて持ち上げて、オリンピックで金メダルなんて獲れる獲れる！！？